



TITLE:

欧米の大学・教育を訪ねる

AUTHOR(S):

吉田, 和男

CITATION:

吉田, 和男. 欧米の大学・教育を訪ねる. 調査と研究: 経済論叢別冊
1993, 5: 1-19

ISSUE DATE:

1993-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/44382>

RIGHT:

欧米の大学・教育を訪ねる

吉 田 和 男

I ハーバード大学

欧米の各地の大学を訪ねて各国の高等教育の状況を実地に見てきた。最初に訪れたハーバード大学では、経済学部で客員研究員としてお世話になった。ハーバード大学はさすが全米でトップのプレステージを持つ有名大学だけあって素晴らしい環境にある。ラブ・ストーリーという映画のロケ地にもなった場所であり、広い芝生の広場がたくさんあり、古いニューイングランド的な建物とよくマッチしている。4—5月には桜、花ミズキなどの花が咲き乱れ、まさに絵に書いたような大学である。スタッフも世界的に著名な学者が山のように集まっており、壮観な感じである。学生数は京都大学経済学部とほぼ同じであるが（京大の学部生の定員は京都大学の方がやや多く、大学院の定員はハーバード大学の方がやや多い）、スタッフの数は京大が約40名であるのに対して、ハーバード大は80名近い学者がおり数の上でも大きな差がある。しかも、質的にも世界的に著名な先生ばかりで圧倒される。

講義もいうまでもなく充実しており、学部、大学院あわせてであるが、マクロ経済学関係だけでも20近い講義があり、ミクロ経済学関係でも10以上、計量経済学関係でも10近くあり、ここで勉強できる学生は全く羨ましい限りである。しかも、極めて幅広い範囲をカバーしている。また、講義は様々なグレードに応じて何段階もあり、それに事前に受講しておくべき講義が明らかにされており、システムティックなカリキュラムが立てられている。これにより、大学院の前半で学会の水準に達する学習が十分でき

るように工夫されているのはさすがである。

注意が必要なのは日本とアメリカでは大学は同じ4年間であるが、その考え方は大きく違う。アメリカの学部の4年間は、日本の大学の教養課程であり、いわゆる専門的な勉強は大学院で行うことになる。アメリカの大学はいわゆる教養大学であり、専門教育は大学院からである。経済学部の大学院に入学するものは経済学部出身者とは限らず、他の学部を卒業して経済学に取り組む者も少なくない。したがって、経済学部の大学院には他の学部出身の人も入ってくるので、大学院自身独立し完結した講義を持っていて、入門的なものから受講できる。したがって、外国人の留学生なども入りやすくなっている。

アメリカの大学の特徴は学部がいわゆる最終学歴となるのではなく、大学を卒業すれば、大学院へ行き、そこで PhD をとって、大学、研究所、国際機関、中央銀行、政府機関などに就職して行く。あるいは、一旦就職して経験を積み、ビジネス・スクールやロー・スクールに入って、MBA や弁護士資格をとって再び企業や法律事務所に就職する。

アメリカは資格社会であり、PhD, MBA, 弁護士などの資格がなければ社会で出世できず、給与も大幅に違う。筆者も大蔵省時代に学位を京都大学から授与されたが、それで給与も何にも変わらないと説明すると、非常に驚いていた。では何のために学位を取ったのかと質問される。

従って、学生は日本の学生と違って、ともかく勉強勉強で、講義、予習、試験勉強で全ての生活が潰れる。大学は学生には講義と試験でサービスするというのが米国流のようで、確立

した学問を教育するという考えが徹底している。また、年間1万数千ドルという大卒の初任給の半分近い、高い授業料を払うのであるからしっかり勉強しなければ元が取れない。日本の学生が勉強しないのは授業料が安すぎるからかもしれない。先生の方はどんどん宿題と試験を出して採点等はティーチング・アシスタントがやるので楽なものである。

アメリカの学生がよく勉強するのにはそれなりの理由がある。学部生の場合は、大学が最終学歴でなく次の関門である大学院、ビジネススクール、ロースクールに入るためにはよい成績が必要だからである。理系の場合もメディカル・スクールに入る場合は日本の受験勉強以上の勉強が必要という。日本の場合は、大学、しかもできる限りブランド大学を卒業することが社会での必要条件になるために、そこへ入ることをめざす高校生が一生懸命勉強するのと同様の状況にある。

ビジネス・スクールでも成績は5段階の相対評価であり、Eがいくつかつくとやめなければならない。相対評価であるので必ず誰かは最低評価を受ける。また、成績で給与が異なってくる。最上成績の者はコンサルタント会社などへ7万ドルというかなり高い給与で就職する。これが悪いと5万ドル以下ということにもなる。成績は授業での受け答えも対象となるので予習が極めて重要になる。ただ、たいした受け答えではない。大学院のPhDコースの場合、少し様子が違うが、大学院卒業後の就職はオープン・マーケットによるので、全ては勉強にかかっていることは言うまでもない。

ただ、ハーバード大の場合は特別に勉強が厳しいようで、学生が全体的に暗い感じがする。着ている服から地味で、やや下向きかげんに足早に歩いて行く姿は勉強のプレッシャーの中にあるのかなとの感じである。しかし、これがボストン大学になるとやや明るい雰囲気になり、聞いたこともない大学（ケンブリッジには56の大学がある）になると底抜けに明るい。いわゆるキャピキャピ女子大生も多い。ハーバード大

ではなんとなく女子大生も暗い感じがする。

日本の大学の場合は、戦前はヨーロッパ流の学校制度であり、教養中心の高等学校3年間と専門の大学3年間が高等教育機関であった。戦後アメリカ軍の占領政策によって両者を結合して4年間に短縮したのであるから、本来、専門課程に相当するのはアメリカでは大学院になる。しかし、日本の現実是非常に中途半端なものとなり、教養も専門も十分でない状況で、教養もなければ、一人前の専門家としての基礎知識もなく卒業して行くことになる。また、専門課程の学生が専門分野のオーソリティーになるべく勉強しているという自覚は全くない。工学部の場合は、教養課程から数学や図学の専門課程があり、四年生からであるが研究室配属があり、相当部分は修士課程に行って就職することになるので戦前の制度と近いものになっている。

Ⅱ 日米大学比較

日本の大学とアメリカの大学では基本的な考え方に相当差があるように思える。アメリカの場合、教育産業であり、授業料をとって質の高い教育サービスを提供することに熱心である。したがって、そこには厳しい競争原理が働く。これは学生も教師も同様である。アメリカの大学はランク付をする機関があり、教授陣の量質、教授内容・設備、卒業者の質などによって評価している。これを上げるために各大学は優れた学者の獲得、設備の充実などに努力する。そうすれば授業料を高くでき、より大きな寄付を獲得することができる。市場原理で大学も評価されることになる。

日本の場合は必ずしも教育産業として職業につくことを希望する者に教育を売するという形にはなっていない。大学のランクは偏差値によって決まり、いわば受験生が評価することになる。従って、学問も社会も何も知らない高校生とそれを指導する高校の教師が決めることになる。すなわち、大学での教育は専門教育としても必ずしも期待されていない。むしろ、人格教育とか人間的な付き合いの中で様々なものを学

んで行くことが期待されるのが基本であろう。これは、社会の教育のあり方がすべてそうである。日本では企業は白地の学生を雇い、企業内のオンザジョブ・トレーニング（仕事をしながら教育する）で企業に適した人間に育てて行く。これに対し、アメリカの場合はもともと教育された者を雇うので、外部の専門教育機関が重要になる。企業内で教育を行なう場合でもオフザジョブ・トレーニング（仕事を離れて教育する）である。

また、日本の場合は大学卒業者や MBA を経営者として雇うキャリア・システムが存在しない。企業内での経験を積み上げて上級管理者に育って行くことを期待するのが日本流の経営である。従って、日本でビジネス・スクールを作ったところで、経営者としての教育が役に立つのは入社後、20年経ってからである。また、そのころには経営システムが変化して全く役に立たなくなる。まして、経済学の教育が役に立つとしてもそれはずっと先の話である。

したがって、日本の学生は大学での勉強が社会で役に立たないことはよく知っているので、勉強しないのは当然と言えば当然である。教師の側でも就職して役に立たないのは当然であり、むしろ役に立たないであるべきというように考えている向きも少なくない。実業界のある先輩が最近の学生は勉強しないでけしからん、君らが悪いと言うような話をされた。そこで大学で勉強した学生を採用して下さい、貴方々が勉強しない学生ばかり採用するので学生が勉強なくて困ると話したら、黙って笑っておられたが、実際そうである。ここで、企業が新卒者に要求することは大学での学問のレベルではなく、フィットや協調性の問題となる。欲しいのは企業教育に対する学習能力と根性であり（受験に勝ち抜いてきた実績があり）、会社に適応しやすい人間である。

大企業に入って経済学が本格的に必要なものは、企画部などで企業の将来計画を立てるとか、調査部で調査資料を作るということ以外は取締役になって経済の動向を見ながら企業経営

を行なうとか、同業者団体の中心者になって業界をどの様に運用して行くか、官庁にどの様なことを要望するか、さらに、経営者団体の役員になって、政治運営にどの様な注文をつけるかといったレベルにならないと経済学を役に立てる機会がない。これは学生にとって余りにも先の話であり、勉強する誘因にはならない。逆に、日本の中心的な影響力を持つ人たちが古く間違った議論をベースに日本経済を考えていることも、非常に困ったことでもある。

しかし、大学を卒業した企業人でも常に社会を自ら分析し、自らの見識を持つことは企業の利益云々より先にある知識人としての役割であり、企業のためでなく、知識人として生きることはそれ自身が喜びである。それは利潤によってものを考えるのではなく、学問によってものを考えることである。大学は学問でものを考える者のための教育機関でなければならない。

日本の学問の伝統は、江戸時代の昌平校、また、松下村塾、適塾の様な民間の学校でも中国の科举試験のための教育とは大きく異なって、資格試験に通る知識だけを教えるところではなく、人格教育を軸としていた。明治以降の教育体制も、西洋の学問を基礎にした人格教育という面が強く表れている。これは高等学校制度に強く表れていた。ここで自由に学問をし、これをもって自ら真理を追求して行く立場を作ったのである。しかし、もっと自由になった今日、真理を追求する自由を放棄しているのは何とも嘆かわしい。

したがって、アメリカのようにコースワークだけを必死にやらせるような方法は、日本の伝統にはそぐわないように思われる。しかし、学問の自由を学問をしない自由と勘違いして卒業して行く学生が多い今日、アメリカ式の勉強方法も導入する必要があるようにも思われる。また、年々学界で積み上げられて行く研究の成果を吸収して、学界のにキャッチ・アップするためには、気ままと思いつきで勉強するだけでは不可能である。現在の学問のレベルは過去のものとは大きく水準が異なるのは言うまでもない。

学ばなければならないものは過去より多い。かつては IS=LM 分析くらいをマスターしておればいっぱしの議論ができた。しかし、現実にもそれだけではマクロ経済政策を議論することができない。まして、学界で蓄積された議論は膨大なものである。学会のレベルと学生のレベルがかけはなれてしまった今日、これをいかに小さくするかも大きな課題であり、効率的なカリキュラム、アメリカ流のプログラム学習も必要にならざるをえない。自由な学問もその基礎教育が必要である。それが十分に行われなければ、学問の自由以前の問題となってしまう。

アメリカの大学（大学院）はそのようなレベルへのキャッチ・アップへの教育という点で優れた内容を持っており、アメリカ流のシステムを一部導入しなければ、現代の経済学にすらついて行けなくなる。日本はその伝統を失うべきでないし、それはできないであろう。問題はそれに適した体制になっていないことが問題を引き起こしている。

また、日本は数学の水準が高いという神話があったが、全く誤っている。現在の経済学部の子の数学のレベルは驚くほど低く、現在では日米ではむしろ逆転している。日本の大学院生でも現在の数学の水準ではアメリカの大学院での教科書を読むことすら難しい状況にあり、憂うべきことである。経済がうまく行っているといって浮かれていると大きな落とし穴が待っているように感じる。

日本の大学（院）のシステムをアメリカ式に変更しようとする動きが強いのも今日の状況を考えるとやむを得ない気がするが、同時に独自の新しい考えの導入に努力する必要がある。そのためには、もっとエキサイティングな学問を作ることが重要である。極く限られた基本的な科目、例えば、マクロ、ミクロ、計量、数学などのコアはプログラムの的に学習し、それ以外はもっと自由な教育体系（経済学部には捕らわれない）が必要になってくる。

さらに、新しい専門教育システムを導入したとしても、日本の大学教育は社会に出てからの

評価と全く異なるために、アメリカと同じ機能を果たすことを期待することは難しい。今後の日本経済の変化を見極めるとともに、大学が学問を発展させるという役割についてもっと一般に認識されるようになることが必要であろう。

さらに、大学は学生にいかに勉強させるかもっと制度的な検討が必要でないかと思う。「日本人は勤勉である」という命題は直ちに反証することができる。日本の学生の現状を見ればこの命題が正しくないということは一目瞭然である。同じ日本人が企業に勤めているのものは勤勉で、学生の大半は勤勉でない。これは制度的な欠点があるとしかしいようがない。結局、日本人は信念をもって勤勉なのではなく、廻りが勤勉であれば勤勉になり、廻りが怠けていると怠惰になる。確かに、現在のような大学教育は産業の発展には役にたつかも知れないが、日本の特に指導的な立場につく人の知的水準を低くしていることは大きな問題である。

いずれにせよ、大学に学問の立場から考えるという気風を作り上げて行くことが重要と思う。すなわち、精神の自由の世界という大学の出発点から大学が再構築される必要があるように感じられる。

Ⅲ ハーバード大学の卒業式

ハーバード大学の卒業式を見学した。有名な卒業式だけに、是非見学したいと思っていた。卒業式は非常にプレイアップされ、荘重な儀式であり、学生の聖歌が時々ながれ、6月というボストンでも最高の天気の時に行われるのは見応えのあるものである。ここでも、日本とアメリカの違いを見せつけられる。まず、卒業生の演説の素晴らしさである。女性であったが、内容よりもその話しぶり、観客を絶えず笑わせて行く方法に感心したものである。ようするに、大人、しかも政治家や社会的リーダーそのものである。考えてみれば当然であり、その様な技術を学びに行くのが大学である。日本の卒業式は残念ながら知らないが、あれほどの演説を行うことは難しいであろう。日本であれほど

上手な演説をすれば、口だけという陰口が必ず寄せられるであろう。それほどの内容のないのに立派な演説をすること自身、日本では恥しいこととされる。自らの能力を誇示して、競争に勝って行かねばならない厳しい、ある意味で可愛そうなアメリカ人の姿かも知れない。

最も日本の卒業式と異なるところは父兄の多いことである。個人主義の発達した米国で意外なことであるが、両親が揃って、また、場合によっては兄弟まで引き連れて卒業式に参列する。卒業生の席の3—4倍以上の関係者が会場が埋まる。壮観なものである。日本の卒業式にも親が参列することが増えているが、その比ではない。親と子供の関係は日本に比べ非常にドライであるのは言うまでもない。日本のように子供をべたかわいがわりすることはない。しかし、自慢の息子がハーバード大学を卒業することの感激は大変なものであるように感じる。たいていは、その前から引越しの手伝いにきたりしているため、卒業式が近付くと、ハーバード界限にはやたらと初老の夫婦が増えてくる。レストランで食事をしていると、両親と息子・娘と食事にくる。非常に幸せそうな時である。そして、卒業式の当日、優れた息子・娘を持ったことを誇るように参列する。

また、日本と大きく異なるのが卒業生の顔である。解放感に溢れ、本当に嬉しそうである。要するに過酷な勉強から抜け出ることができるという解放感である。これに対して、日本の学生の卒業式は慣れない背広を着ているせいか若干緊張気味で、良き学生時代に別れを惜しむという雰囲気である。これから待ち受ける企業という厳しい管理社会の中へ入って行く悲壮感すら感じられる。まるで出陣式である。

ハーバード大学の卒業式の風景に近いのは日本では入学式である。非常にたくさんの父兄が付き添ってきて、その顔は自慢の息子が一流大学に入学したという誇りに満ちている。入学する学生にとっても受験戦争を勝ち抜いてきた解放感からほっとしたわくわくする明るい雰囲気である。もちろんハーバード大学に入学式はな

い。

この違いは日本と米国の制度の差に大きく依存している。米国の場合、入学したからといって卒業できるとは限らない。勝負はこれからである。大学院の場合は特に厳しい。これに対し、卒業式は毎日の宿題と試験の厳しい地獄の大学生活から抜け出る、みそぎの儀式である。卒業すれば、全てではないがビジネススクールの卒業生は年俸、5—7万ドルの幹部候補として就職して行く。他の卒業生も企業に就職する場合には、それなりの地位を約束されている。これから、自らの力を発揮できる機会が与えられており、まさにやる気まんまんである。

日本の大学の卒業生は気の毒である。卒業までは全く自由であり、勉強をしなくても全く自由であるし、好きな時に起きて好きなことをするのが学生である。パラダイスにいた人間が突然、世界でも最も厳しい管理社会に入っていくのであるから大変である。しかも、一般に、幹部候補生として特別待遇を受けることはなく、丁稚奉公から始めなければならない。銀行にはいけば、お客さんの所へ集金に、電鉄会社にはいけば切符切り、メーカーに入れば工場が営業である。幹部候補生として認められるには、まだまだ、最低10—15年の時間がかかる。パラダイスから地獄へというのが日本の卒業式である。日米の学生の表情が異なるのは当然である。

これに対して日本の大学入学者は幸せである。小学校以来、母親と共に一つの目的に専念してきた目的がやっとかなうのである。毎日、4当5落といって勉強してきた汗と涙の成果がここに完成するのであるからこの上なく嬉しいのは間違いない。アメリカの親は自慢の息子が大学を卒業したことで社会の一流の人間の仲間入りができたとして大喜びするが、日本の親は自慢の息子が厳しい受験戦争を勝ち抜いて一流校に入ったことで極めて大きな喜びを噛みしめる。大学で何をしようが全く関係がない。彼らには大学で受ける教育には全く興味がない。一流大学に入れば一流会社には入れることは親も子もよく知っている。しかも、大学の勉強が会社に

入ってから役に立たないことは学生以上に、経験者である親の方がよく知っている。学生にとっても勉強することは不合理であり、専ら人生を楽しむことに専念する。大学で勉強しなくてもあるグループに入ったという社会的な地位は確保されている。

日本では入学即卒業であるがアメリカでは卒業できるとは限らない。従って、アメリカでは入学はめでたいことでもなんでもなく、入学式もない。考えれば当然で入学資格は大学にとっても学生にとっても対して重要なことではなく、大学で何をどこまで学び、資格を身につけたかが問題であるはずである。それを終えたことは誠にめでたいということになる。ところが、日本では同じ大学の卒業者という仲間に入ったということがめでたく、これは一生続くメンバーシップである。大学が精神の世界であり、知の国であることが本当に理解されるまでは、この青春の壮大なるムダ使いは続くことになる。

ここでみても、日本社会と米国社会の違いとしか表現できないのであるが、何かおかしいというのが素直な感じである。資本家の力が消滅した日本の大企業では企業内のサブ・グループが重要であり、どここのサブ・グループにはいるかの一つがどの大学にはいるかで決ってくる。わが国の社会の作り方はアメリカの市場主義と違って人間関係主義である。したがって、どこで人とつながっているかが非常に重要になってくる。逆に言えば、大学に入った瞬間、その様な利権を得ることになる。すなわち、大学は利権獲得機関であり、多くの学生もその様に感じている。従って、利権のより大きい大学に入ろうと必死になる。しかし、大学は決して利権機関であってはならず、利権を批判すべき立場にあるのが大学である。

しかしながら、日本では受験戦争が余りにも強く、このために学問になんら関心を持たない学生が大学に入って来ることになり、大学の機能を弱めているのに対して、アメリカではプロフェッショナル教育が厳しすぎ、経営に関心を持っていない人（ゲームとしての経営しか興味

がなく、人間の組織を本質的に考える力が低いのではないかと思う）たちが実業界に入ることによって経済を駄目にしているのではないか。そもそも、目的と手段が混交し、手段が自己目的化するところくなことにはならない。伝統的な学問の考えを軸にした大学の再構築が求められる由縁であろう。

IV 大学経営と社会

アメリカの大学もアメリカ社会の一部であるということには変わりがない。すなわち、競争原理の中で生きている。大学の資金は、授業料の他、大学、学部、講座にそれぞれ基金があり、その基金の運用益、それに対する寄付で各々のセクターの運用が行われる。一般に、大学への授業料は大学へ納入され、本部の運用経費とされると共に、学生数割で学部にも資金がきて学生サービスに主として使われる。日本からみれば極めて高い授業料であるが、これは学生サービスのための経費で、教授の給与、研究費は基本的に基金運用益、寄付に頼ることになる。教授の給与は講座の運用益から出されることが多く、経済的基盤は独自で賄われる。提供者の名前の付いたポストがある。研究費は講座の運用益に政府の補助金や民間の寄付による場合が多く、その場合、オーバーヘッド（共通費用）ということでは何分の一かを学部や本部にとられる。もっとも、研究費を申請するときにオーバー・ヘッドとして予算に組み込むのが認められるのが普通である。学部によって基金の大きさが異なるので、豊かな学部と貧乏な学部が生まれる。卒業生による寄付もあるので、有力な卒業生を出しているところは豊かである。また、寄付の大きな所は豊かになる。大きな寄付をするのは金持ちの未亡人が多い。金持ちの多くは死ぬと未亡人にお金を残すからである。その未亡人は社会のためとして大学に寄付をする。例えば、ハーバード大学などは非常に有利な立場になる。そこで、ハーバード大学の中央図書館はタイタニック号の沈没で父子を亡くした未亡人の寄付で、寄付の条件は水泳を授業で行うことだった

そうである。未亡人が寄付をするとなると良く知っている分野ということになり、文学や人類学がその恩恵に預かることが多い。英文学がもっとも豊かな学部になるという。豊かな学部では大学院生の奨学金なども多く、秘書もたくさんいる。貧乏な学部では、毎日の事務費も事欠くという。学部も強いところと弱いところでキャンパス内の場所も異なり、どこでもそうであるが、縄張りは重要である。

教える側も全く厳しい競争に晒される。アメリカの学界の新人は、まさにオークションで売買される。そして、彼らはまだ一時的な雇用であり、テニアー（終身被雇用権）を取るために、さらに努力しなければならない。この競争から落伍すれば、他の適当な大学へ移ることになる。また、引き抜き、転職は普通のことである。ハーバードの場合でも、コルナイ、セン、マスコーレルなどヨーロッパやアジアなどからたくさんの方々が来ている。これらの基本的なインセンティブは給与であり、業績のある学者は、より高い給与を提示した大学を目指して移って行く。新しい学者の獲得にはディーンが提示する年俸額の概要にしたがって交渉する。そこでも議論されるのがマーケット・バリューである。学者も市場で評価されるのがアメリカ式である。このため、野球選手に負けない給与の学者もいるという。逆に、業績を出さない教授は給与も上がらず、惨めなことになる。

また、基本的に研究を行うための費用は自ら集めなければならない。資金集めがうまくれば業績が上がり、業績が上がれば資金集めが楽にできることになる。大学の研究を一般に理解してもらうことは難しく、逆に理解してもらえるような研究は努力する必要がない。なかなか大変なようである。特に、ケンブリッジにはたくさんの方々のベンチャー・ビジネスがあり、多くはハーバード大学、MITの先生が関与している。彼らは大企業の研究のコンサルタントを行い、やがてパートナーが見つかる独立してベンチャー・ビジネスを設立する。そして、成功すればそれを売り飛ばして大金を手にする。多く

はみずぼらしい殺風景な建物で、中にはいれば大学の研究室と変わりが無い。成功すれば例えばボラロイドの様な大企業に発展する可能性も持っている。これは大学人の所得の低さ（我々から見ると高いのであるが、相対的には低い）に加えて、研究費を集めるのが難しいことにもよっている。アメリカの研究助成も予算が削減されており、研究者も苦しいようである。ただ、アメリカではコンサルタントの社会的地位は高く、金稼ぎというよりむしろそれが現実との接点になっていて、研究を促進するものと見ている。経済学の場合などはサバーティカル・オンリーブになると政府（外国を含め）のコンサルタントになって、世界を飛び回っている者もいる。これはプレステージを高めるだけではなく、まさに生きた経済を自ら扱うことで実践の学問としての価値を高めることになる。日本の学者も彼らが書いた論文で勉強しては、問題であろう。また、人によっては予測会社を作って経済予測を売っているような場合もあるという。

V 講義・学生生活

講義は先生によって様々であるが、立て板に水のように流麗な講義する者から、つかえつかえ冷汗を流してやっている先生まで様々である。学部レベルの授業では比較的丁寧でオーソドックスな授業が行われるが、大学院の授業では最近の論文を紹介しながら学界の議論の水準の授業が行われ、ホットな感じが強い。講義は Semester 制（前期と後期に分ける）で、一定の期間内に集中的に講義を行う。教授も週に5コマも講義を行わねばならず忙しいが、学生も大変である。前期で中級のレベルをやり、後期でアドバンスドなことをするといったことができ、集中して勉強ができ、効率的である。

また、研究面ではセミナーが充実していて教授が主催して週一度セミナーが開かれる。そこへ助教授、他大学の研究者、時には大学院生が報告し論争が行われる。毎日、4、5のセミナーが開かれており、まさに学問の花畑のようである。このために、それこそカリフォルニアあた

りからもきている。学問が議論によって発展するのであるが、それを実際に行っている印象である。担当の教授の他、他の教授や大学院学生などが出席し、論争が行われる。報告者はセミナーでの議論が論文の完成度を高めてジャーナル(学術雑誌)掲載に応募することになる。若いアシスタント・プロフェッサーはテニアーを取らなければならない、これは論文がジャーナルにどれだけ載るかによっているので真剣である。大学院にしても先端の議論を通じて勉強ができる。主要大学はセミナーによって学問のセンターとして機能しているので、日本の大学ももっとセミナーを強化する必要があるだろう。

ハーバード大学の中に入ったところにハーバード・ヤードという広い芝生の庭がある。リスが走り実にはどこかで感じのよいところである。この広場の廻りの建物は大学の寮になっており、一年生は全員この寮に入る。二年生からはここを出て、大学周辺のアパートに移ることになる。この一年間に全国から、世界から集まった同年令の学生と共に生活することが彼らの勉強の刺激になる。各地では成績トップの天狗達が、ここでこれまでと違ったライバルとの競争に晒され、鼻柱を折られることになる。このような学生の共通した生活体験と言うのは極めて重要であり、羨ましい限りである。日本の学生寮は汚く狭くまた収容も極く一部であり、全く惜しい気がする。旧制高等学校では全寮制で先輩から教えられ、同級生と競うことで学問の最初の障壁を突破したのであろうが、今日ではそのような機会がないのは、個人的に人格形成の重要な機会を失っているだけでなく、国家的損失ではないかと思う。

また、各スタッフはオフィス・アワーを設けており、予約をしておくくと気楽に会ってくれる。学生もアドバイザーの指導によって、勉強を勧めることが出来、オフィス・アワーを設けることはよいことのように思う。ただ、秘書がいて十分に管理しているところが日本では難しいところである。

Ⅶ ウィーン大学

ウィーン大学を訪れた。現在のオーストリーに加えて、チェコスロバキア、ハンガリー、ポーランドの一部、ユーゴスラビアの一部、イタリアの一部など広大な領土を持ち、かつて神聖ローマ帝国の皇帝であったハプスブルグ家が学術、芸術に傾けた力は大きく、ウィーン大学はヨーロッパの学問の中心地として隆盛を誇った。ハプスブルグ家が第一次世界大戦で崩壊し、また、第二次世界大戦でナチによってドイツに併合され、たくさんの亡命者を出したところからかつての栄光はない。

ウィーン大学の中庭には歴代の教授の胸像やレリーフがおかれ、ウィーン大学の歴史の重みを示している。歴代の教授の胸像やレリーフが中庭に面した回廊に並べられている。ボルツマン、ローレンツ、フロイト等々学問の歴史そのものが並んでいるような感じがする。ノーベル賞学者が12人であるというのは一般の人にも尊敬と驚きを持ってみられるが、それ以上に、戦前の長い間、学問の中心地として誇ってきたことを示している。ドップラー、シュレジンガーなど数学、物理学を中心に高校の教科書に出てくるような名前が並ぶ。経済学ではメンガーやバベルクのレリーフもあり、オーストリー学派という経済学史上でも重要な大学であることが偲ばれる。ただ、残念なことにかれらはレリーフであり、しかも隅の方の柱の影である。その前の回廊には法学関係の教授の胸像が堂々と並んでおり、経済学はやっぱり力がないなあ実感する。

ウィーン大学は筆者らにとっては独特の憧れがある。オーストリー・ハンガリー帝国の中心として世界の俊英を集め、世界の学問の中心であったのはついこのあいだのことである。ウィーン大学はさまざまな業績に輝いているが、ウィーン学団と呼ばれた論理実証主義の哲学のグループであり、マッハ、カルナップなどを中心として花開いた。また、オーストリー学派の創始者である経済学者のC.メンガーの子供で

幾何学者のK.メンガーが主催したセミナーに集まったバルド、フォン・ノイマンなどはまさに当時の数学の最高峰を示していた。彼らは数学での業績だけでなく、経済学にも大きな功績をなし、数理経済学の原点となった。このセミナーにも関与していたハイエク、ポPPERなども経済学に大きな地位を築いた人たちであった。彼らの学問の特徴は、単に専門の領域だけで優れているだけでなく、あらゆる面での功績があることである。フォン・ノイマンに見られるように数学でも数々の画期的な業績を残し、ノイマン型コンピュータ（演算処理を直列的に行う方法でほとんどのコンピュータはこの論理にしたがっている）というのが名称としてあるようにコンピュータの計算論理の基礎を作った。経済学でもノイマン革命という呼び方があるくらい画期的な理論を提示している。彼とモルゲンシュタインの共同研究から生まれたゲーム理論は今日では経済学の重要な分野であると共に、数学や工学の分野でも重要な分野となっている。彼らの書いた部厚く難しい本は後の学生たちを悩ませている。何でもやれるスーパーマンのような天才である。また、歴史にも知識の深いことでも有名であった。バルドにしても数学者、数理統計学者としても画期的な業績を上げ、たくさんの論文を書いたことでも知られる。標本検査の理論では軍事機密にもなったという極めて優れた学者であった。経済学でも市場の一般均衡解の存在証明に関して初めてこれを提示するなど大きな存在である。

今日では米国の学問が主流になるにつけ、優れた学者が米国へ流れ、ヨーロッパにはかつての栄光を享受していないように思われる。特に、ウィーンでの学問の伝統がナチスによって分散されたことは極めて惜しまれることである。ウィーンは現在の東欧各国から富を集めただけでなく、頭脳をも集めたのである。ノイマンもハンガリー人である。学問はそれを集中させることも重要なことで、かつての京都大学の哲学もその様なものがあつたが、現在は面影が少ない。なぜ、この地で学問が花咲いたのか。地理

的に言えば、富を集積したハプスブルグ家が自由活達に学問の発展を支援しただけでなく、ウィーンは自由な気風に満ち、モーツァルト、ベートーベン、シュトラウスなどの音楽が競演した町であり、文化が支配した町であったことによろう。B.バベルクに代表されるように、行政官（大蔵大臣）を経済学者に行わせるなど学問の重要性を認識していたハプスブルグ家の見識であった。今日、日本の大学のおかれている位置を見るにつけ、学問の花が咲くような状況ではない。民主主義国ではなかなか大学に予算がつかない。本来、民主主義とは理性が多数にあることから始まったものであり、国民の希望を実現することに目的があつたわけではない。社会保障は削れないが、反対の少ない大学予算は幾らでも削れるというのはギリシャ時代の衆愚政治である。大学に入ることを目的に子供に勉強を強制する親は愚劣の典型である。大学は既得権益を保護する場ではない。子供には学問をめざして勉強させて欲しいものである。

Ⅶ ソ連の大学

モスクワ大学を訪問した。モスクワ大学はともかく大きな大学であり、スターリン様式建築の代表的な建造物である。下から見ると、まるで、ピラミッドを見ているようであり、ばかでない。最上部にある赤い星が極めてまぶしく、いかにも共産党が支配している最高学府というイメージである。入口は兵隊のような服を着た者が守っており、容易には中に入れない。大学人で興味があるのでと説明して入れてもらったが、通じたためかどうかは分からない（ともかく英語はどこでも通じない。一旦、出た後、もう一度入ろうとすると兵隊のような守衛にパスポートを取り上げられそうになり、入れなかった。なぜかよく分からないがともかく警戒厳重であった）。ともかくでかくて、へたをすると迷子になってしまう。大学が丘の上にあるので、大学の最上部からモスクワ市内を見るとすこぶる眺めがよい。中はたいして立派な作りではないが、大学らしい雰囲気モスクワ市内とはだ

いぶ異なる。ともかく何の授業か分からないが、授業風景は日本ともたいして変わらなく、大きな教室（かなり馬鹿でかい）で行われ数学を使う授業が多いようであった。学生は熱心に講義室が大きいのに、私語もなく立派なものである。

経済学部は本館の外の近くの建物にあったが、余り立派な建物ではない。ソ連の経済学部は昔から近代経済学中心であると聞いていたが、たまたま見聞きした講義も産業連関論、波及効果の収束問題と初等的な数学と数理経済学に関する講義ばかりであった。また、物流に関する数理的な解析が取り上げられていた。ソ連時代にも、ノーベル賞をもらったカントロビッチをはじめミチーノフなど近代経済学に大きな貢献がある。マルクス経済学は経済学部の問題ではなく、科学的共産主義学科で行われていると聞いたが、八月の共産党解体以降、廃止されたという。セント・ペテルスブルグでも共産主義大学は廃止されていた。

ただ、経済学部の建物の中を歩いていると、壁に張られた妙な図に出くわした。どうも軍事関係の部門に迷い込んだ。壁には核戦争の戦い方が図示しており、核爆弾が爆発した場合の被害の生じ方を図解して、それに対処するための様々な方法が図解されていた。当然と言えば当然であるが、本気で核戦争を戦うべく準備をしていたのでありゾットする。別の壁には学生が軍事訓練を行ったときの写真や軍服姿の学生の写真が張っており、大学と軍との結び付きの深さを感じさせた。また、教室ではパソコンでコンピュータの演習を行っていたが、軍事機密に触れて捕まってもヤバイと思い急いで大学を出た。

VIII ドイツの風土と学問

学問を考える上でドイツは大きな位置を占める。ともかく、日本もかつての学問の主輸入先はドイツであった。近代の論理が学問として花開くのはドイツであった。それはヨーロッパ封建制度の所産であったように感じる。封建制度が近代国家を形成し、それぞれ独自の文化を形

成した。近代になってキリスト教の精神支配からの脱却が行われると各国はその文化を利用して学問を発展させ、お互いの競争がこれだけの大きな成果を生んだのであろう。すなわち、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、オーストリーと大国が独自の文化を背景に独自の学問を生み、異なった文化が普遍性の土俵の中で競ったことが大きな発展を生み出した。それに留まらず、オランダ、デンマーク、スウェーデンなど小国が同じレベルでこれらの学問の発展に独自のアプローチによって加わる事になる。これが巨大な財産を築くことになる。このような状況は風土にも大きく影響された様に感じる。

シュツットガルトとミュンヘンのちょうどまん中にウルムという町がある。ここには世界一高い大聖堂があり、ここに登ると地球が丸いの分かるという。残念ながら天気の関係でそこまでは見れなかったが、ともかく美しい地域である。中世の町並みの中、ドナウが美しい流れを見せており、ドイツの風土に接した感じが強くする。この地は哲学者のデカルトがドイツへの出征からの引き上げの途中で、この地に寄り、暖炉部屋にこもり大哲学者になったことで有名な土地である。まさに、その様な哲学者を生む感じの土地であった。アインシュタインの生誕の地であることでも有名である。人口10万程度の本当の田舎町であるが、テレフンケン AEG の本社があり、電子技術のテクニカルセンターがある。中世の町並を歩いて、本屋に入るとそこにはコンピュータ、電子技術関係の本で一杯で、不思議な町である。

落合太郎氏訳のデカルトの「方法序説」の訳註には「ウルムというと、そのわきを流れるドナウ河もだいぶ上流で、山々は近くに迫り、十一月ともなればすでにほんとうの冬景色であったろう」と書かれており、筆者もこの様なイメージで行ったのであるが、見ると聞くでは大違いであった。確かに地図でみればドナウの上流であたかも山間部のような感じである。しかし、聖堂の上からみれば見渡す限りゆるい丘を含む平原の中にあり、遙かなたにアルプスが

見えドウナウ川も何百メートルの大きな河幅でゆっくりした流れであって、落合氏の説明とは大きく違う。十一月末に行ったのであるが、黄色に色づいた紅葉が実にきれいで、暖かく冬景色には到底時間がかかる状況であった。落合氏の註とは随分現実とは異なり、日本人が外国を予想することは難しいものだとつくづく思った。

シュツツガルトのヘーゲル・ハウスを訪れた。ヘーゲルの生家が記念館になっている。中には書簡や文章があり、出版された本の初版のものが展示されている。初版本に博士かつ教授ヘーゲルと書かれており、その重みを感じる。1770年生まれのヘーゲルは、テュービンゲン大学で学んだ後、いくつかの職を経てニュールンベルグのギムナジュームの先生をしていた。1816年にやっとハイデルベルグ大学の教授になり、2年後にベルリン大学へ行っている。なかなかの苦労人である。ヘーゲルほど評価の分かれる哲学者もいない。一方では、神格化された扱いをされるかと思えば、B.ラッセルのようにクソミソの評もある。ヘーゲルもこの様な風土のなかで、多感な青年時代にフランス革命の波におされて勉強したことが、大哲学を生んだのであろうと思いを馳せた。

ウルムやハイデルベルグは実に小さな町であるが、ドナウ川のほとりや哲学の道を歩くとまるでドイツ人の哲学者になったように思索にふけりたくなる。実に不思議な感じであった。ものをゆっくり、深く考えるのは都市ではなく、田舎であるのは言うまでもない。ドイツの大学町で有名なのはハイデルベルグに加えて、テュービンゲン、ゲッティンゲン、フライブルグ、ライプチヒなど総て田舎町である。しかもアメリカの田舎のように何も無いのではなく、広葉樹の紅葉が美しく、しかも文化の香りがする。この風土にドイツ人特有の議論の方法が加わりカント、ヘーゲル、フィヒテなどの大哲学を生んだのであろう。すなわち、論理的な議論こそヨーロッパ社会の基本的な仕組みであり、個人の価値観と社会の組織化の方法である。

ドイツ社会では特に「批判」が重要となる。

テレビでも、街角でも、職場でもまるで喧嘩ごしの論争をよく見る。相手の議論を破綻に追い詰めるまで追求をやめない。論理的な整合性を厳しく追求することで相手を打ち負かすことになる。その激しさは日本人にはついて行けそうにないなという感じがする。ドイツの議論が非常に論理的であるのはその様なドイツ語そのものにもよるのかも知れない。議論に勝たねば主張は通らない。また、ドイツ系の学問では批判が重要視される。ポパーは批判が学問を発展させるというが、これはドイツの生活から当然生まれてくるものでなのであろう。批判に耐える議論を試み、批判によってより頑強な理論に発展させて行く。さらに、批判によって誤った議論を消滅させ、新しい議論を生み出し、批判に耐えて残ったものが学問であるという進化論的な知識の発展を期待することになる。バランス、情緒を重要視する日本人とは正反対である。ドイツの哲学もドイツ精神、ドイツ文化の哲学的表現であり、学問自身普遍性の概念の追求であるが、それはドイツでなければ出てこないという意味で普遍的でない。

もともと大学は修道院から発展してきたので、学問は神の存在証明から始まっている。チェコスロバキアにはストラホフ文書記念館という古い素晴らしい図書館があり、哲学の部屋、神学の部屋というのがある。ウィーンの図書館も美しいが、それ以上に学問の深遠さを感じさせるようで、学問が神学から発展してきたのをほうふつとさせる。それが数学を生み、近代哲学を生み、自然科学をも生んで大きな発展を遂げることになる。この様な風土の下に育まれた文化が学問に発展して行ったことを考えると、ドイツにただで感激するものである。カント、ヘーゲルなどドイツ哲学はいわばドイツ精神の哲学的表現であり、普遍性を議論しているのであるが、まさにドイツ的なものなのである。文化の対立・競争がヨーロッパの文化の華々しさを作った。

日本も科学を発展させ、学問においても世界に貢献するためには日本の文化を普遍性の土俵

の中で表現することが重要であろう。それが他の文化を背景にした学問を刺激することになれば本当の世界に貢献する学問になるのではないか。

IX ドイツの大学・教育

カールス・ルーヘ大学の機械工学の先生で数理的な物性理論をやっている先生にあった。来日したこともあり、日本のことを良く知っておられた。受験競争のある日本の高校生はまるで軍隊だというまい表現をされていた。ようするに何も考えなくても良いということである。共産党は軍隊だといったチェコの元共産党員の言葉を思いだしていた。要するに全体主義社会である。

ドイツの大学は入学試験がなく、12種類の資格試験を通れば広範囲な中から選択し、自由に勉強に大学へ行ける。各大学は独自のスタイルを打ち出し、それぞれで独自の方法で社会的責任を果たしているという。日本のように東大京大を頂点にした偏差値輪切り入試序列は全く意味のないものであろう。本来はどの大学にどの先生がいるからそこの大学に入学したいというのでなければおかしいのに、どの大学でも、どの学部でも今の偏差値で入れる大学を選ぶということになる。大学の学部の選択は人間の将来を決める重要なポイントであるが、それを偏差値で決めるというのはどういうことであろうか。医者になろうと、実業家になろうと、技術者になろうと全ては偏差値次第では思いやられる。自由主義社会の恩恵をどうして受けようとしなのか全く不思議である。

ドイツの教育はギムナジウム（7年制）に行くか、職業専門学校に行くかで大きく分かれる。中学の進学時点で一生が決まるわけではあるが、各自がそれぞれ専門の分野でのエキスパートになることで、自らの立場を作ることになり、へたにギムナジウムにいて落伍するよりはよいことになる。進学はほとんど先生の推薦で決められ、父兄と先生が議論して子供の将来を決めて行く。推薦が受けられなかった場

合でも、試験で入学する方法もあるが基本は推薦だと言う。ギムナジウムを卒業し、先に述べた資格試験を合格すれば、好きな大学で授業を聞くことができる。ギムナジウムは大学の教養課程をも含む形であり、日本の旧制中学と旧制高等学校を結び付けたものである。大学は専門課程であるが、講義をとるのは自由であり、好きなときにやめればよい。そして、論文を提出して博士号を取ることができる。ただ、博士号の取得には7—8年ほどかかるという。役所や中央銀行の幹部には博士が多く、その意味ではエリートの再生産はしっかり行われている。

日本と同様、アメリカ軍に占領されたのであるが、ドイツは基本的に教育制度を変えなかった。日本はアメリカ軍の言うとおりに総て変えてしまった。そのため教育制度はどうも中途半端である。学問の自由という立場からはドイツのシステムにもっと学ぶところが多いように思う。日本は大学への受験競争はあっても本来の学問への思考は極めて小さい。そもそも本来の大学であるのなら大学への受験競争が起こること自身非常に不思議なことである。そもそも、これほど多くの人が学問を目指すこと自身不思議なことである。ヨーロッパの大学が修道院から出てることを見てもそんなにたくさんの人が大学に行くことは考えられないことである。学問をすれば自ずから禄が生まれるという現世御利益的な発想で人々は大学へ行くのであろうが、大学が学問の立場から再構築することを社会が後押しするようにならねば、大学も生産的にならない。明治政府が人々にいやがる勉強をさせるために、学問すれば儲るといったイルージョンを与えたのがまずかったのであろう。明治以降は人間形成の学問というより、和魂洋才に見られるような実用主義の伝統が定着してしまったのであろう。キャッチ・アップ思想は全く必要なくなった今日、新たな学問の立場を作る時期になっている。

ドイツの大学も州政府に金がなくなってきたところから、どこも産業と結び付かざるをえなくなっているという。特に、研究の成果を産業

に売って運営している研究機関もあるという。世界的に資金的には政府に頼れなくなっているのであるが、もともと独自の伝統を持つドイツの大学も産業と共に行かざるをえなくなっているのは時代の流れかと感じた。

また、先の教授はフランスの大学の工学部卒業者はコストの意識が低いので評判が悪いと、ドイツ流の教育を自画自賛していた。ドイツではバランスをとることが重要と考えており、それが社会的責任であることを強調していた。ベントの工場でみた洗練されたシステムから受ける印象とは異なり、やや意外な感じであった。

ベルリンではフンボルト大学、旧ベルリン大学を訪れたが、まさにさすがに凄いところである。東側なので建物はボロボロであるが、さすがにかつての学問のメッカという感じである。かつてヘーゲルとショウベンハウエルが競って哲学の講義をしたという伝統である。たまたま数学科の教室の前を通ると、かつてのベルリン大学の教授の写真が掲げている。数学の主要な学者のものがかかっている。カントール、ジャコービ、ヒルベルト、ヴァイエルストラスなどほとんどが数学の教科書で出てくる定理を生んだ数学者達である（若干オーバーではあるが）。かつてのドイツのそしてベルリンの学問における地位の高さに感心した次第である。現在では、共産党政権の下で政治的な手段となり、哲学でも数学でもパットしない。フンボルト大学には入った正面にはマルクスの「思考は状況による」といった意味の文章が掲げられており、正にどちらにでもとれる内容であったことが意味深長な感じがした。東ドイツの場合、旧共産圏の中でももっとも急速な形で非共産化が行われ、統一という手段で突然、自由主義、資本主義の社会となった。

一方で、赤狩りも激しく、かつてのナチ狩りの様に徹底したものになっている。司法当局による元共産党員の刑事責任の追求が行われ、最高首脳はほとんどが逮捕された。カール・マルクス大学は元のライプニッツ大学に名称が変わったが、名称変更だけではすまず、多くの大

学でも自然科学系を除き人文・社会科学系は廃止されることが決まっている。ただ、それに関連して訴訟も起こっており、苦慮しているようである。経済学部もボン大学のクレレ教授等が中心になって再建が始まっているようであるが、かつての栄光あるベルリン大学が再建される日もくるであろう。

X イギリスの大学

イギリスの大学ですぐ浮かぶのはオックスフォード、ケンブリッジの伝統ある大学である。二つを併せてオックス・ブリッジというが、まさに政治、経済、学問のいわゆるイギリス・エリートの供給基地である。イギリスの上層階級はパブリック・スクールでノブレス・オブリージ（貴族的責任感）をたたき込まれて、オックスブリッジ（ケンブリッジ大学とオックスフォード大学）を出て中央官庁、中央銀行、マーチャントバンク等に入り、指導者層が形成される。人によってはそこから政界入りして政治家になって行くということになっている。また、教職関係は prestage が高く、大学のみならずパブリック・スクールのような中等教育機関へも就職して行く。しかし、徐々に、卒業生も給与の高いところに動くようになっており、シビル・サービスにつくのが少なくなっていると言っていた。

オックス・ブリッジの教育の特徴はカレッジであり、イギリスの伝統の中で重要な役割を果たしており、独特の学問を生む原動力になっている。ケンブリッジには30強のカレッジがあり、テム川の廻りは古いお城のようなカレッジが集まり、独特の雰囲気である。キングス・カレッジ、グリーンス・カレッジ、ニュートンやチャールズ王子のいたトリニティー・カレッジなど由緒正しいカレッジが並ぶ。どれも一三世紀ごろに建てられたものが多く（新しいものも少なくないが）、伝統の重みを感じる。

学生はカレッジに属し、そこではテュートリアルとスーパービジョンを受ける。テュートリアルはいわゆる生活指導のようなものであるが、

スーパービジョンはマン・ツー・マンの個人指導による教育である。ここで、文献リストをわたされ、宿題として、文献を読んで週に2—3本のエッセイを書かされる。授業はユニバーシティのファカルティで行われる授業に出向いて行く。また、教官側もカレッジのフェローとユニバーシティの教授、講師を兼任し、カレッジではチュートリアル、スーパービジョンをユニバーシティでは講義を行なう。カレッジのフェローの部屋も立派でなかなか趣があり、人によってはそこに住んでいる。ユニバーシティの部屋は貧弱である。ただ、授業に加えて個人指導があるので時間的に忙しいようである。まとまった研究はサバーティカルをとって行うようである。ただ、学期は短く、始まったと思ったらすぐに終る（秋期は10月半ばから始まり12月上旬に終る）。日本も学期を短くし、集中してできるようにするほうがよいのでは。

カレッジは持っている財産の状況が異なり、カレッジの裕福度で学生生活も大きく異なる。裕福なカレッジでは住環境もよく、学生に奨学金や図書費を支給したり、成績優良者には旅行を賞品として出したりするところもある。これに対して貧しいカレッジでは飯もまずいと聞く。寝食を共にして青年時代にお互いに刺激しあいながら勉強することは素晴らしいことと思う。先にも述べたが、かつての旧制高等学校がその役割を行っていたが、GHQが廃止してしまったのは、全くもったいない話である。カレッジに入った学生は、カレッジの中で生活するが、2年生になるとカレッジが持っているハウスなどに移る。しかし、3年生になるとまたカレッジに戻ってきて後輩の指導に当たることになる。大学は、教授から授業で学ぶことよりも同輩や先輩から学ぶこと、刺激を受けることが非常に重要であり、それが日本では少ないことは非常に残念である。日本も真剣に考える必要があるように思う。

オックス・ブリッジの特徴の一つは3年の就業で修士（マスター）の学位が与えられることである。これも考えれば、大学までの就学は日

本より1年長く、また、中高校から専門教育があることを考えれば当然であろう。イギリスの場合は小学校を出るとパブリック・スクール、グラマー・スクールなどを経て大学に入学することになるが、これは日本の中、高、大学の一年の7年間に相当しここでは教養部に相当するまで修学してしまう。パブリック・スクールなどでは高学年になれば、専門的な科目の勉強もすることになる。何でも薄く広く平等に勉強させられる日本と違って、自らの関心と能力に従って専門的な勉強できることは個性を重視する教育の基本であろう。従って、大学での講義もその延長で行うことができる。ただ、日本の方式は広く高い水準を維持することになり、柔軟で対応力の高い青年を生むことになり、確かに近年のような変化の激しい時代には有利な条件を生み出している。

すでに水準の高い教育を受けているために、大学での講義はかなり高い水準の所から始められる。1年生のマクロの講義もケインズの一般理論を読むことを前提として行われていた。ミクロはハーンがやっているそうであるが、誰も理解していないとの学生の話であった。講義では丁寧な説明を行わず、リーディング・アサイメントを渡してきて予習をしてくることになる。日本の講義はサービス過剰なのかも知れない。すなわち、日本では学生を子供扱いしているところに問題がある。大学らしい講義をする必要があることを痛感する。1年生向けのマクロの講義ではケインズの貨幣理論の成立についてとうとうと講義し、ケンブリッジらしさを感じた。講義そのものが物語になっている。アメリカのテキスト的な講義とは大きな違いであり、この魅力も捨てがたい。

ケンブリッジ大学の講義の特徴の一つとして、通常のマクロ、ミクロの講義に加えて、オールタナティブ・アプローチ・オブ・エコノミック・セオリー（経済理論の他の方法）として、一科目ずつであるがポスト・ケインジアン（カルドアやロビンソンの理論）とマルクス経済学が開講されている。しかし、マルクス経済学は

受講者がいないために実際には開講されていなかった。

試験の成績は総て公開され、新聞にも載る。学位には成績がついている。全てが成績順で行われ、例えばカレッジの部屋の割当も成績のよいものに選択権が与えられる。大変な成績主義であり、学生はいやでも勉強せざるをえない。勉強してもしなくても良い日本とは大きな違いである。日本では勉強があるからといって仲間の付き合いを断わることはありえないが、全く普通のことという。どの大学をいっても大学生が勉強をしないというのは日本だけで、考えれば全く不思議な現象である。義務教育でもないし、勉強したいから大学へ入るはずなのに、正に定義矛盾のような形である。勉強したくないのであれば、何も授業料を払ってまで大学に行く必要がどこにあるのであろうか。日本の青年は大学受験で本当の勉強する機会を奪われ、大学に入って勉強しないのであるから一生勉強する機会がない。憂うべきことではないか。

ケンブリッジ等の場合、イギリスの学生は名目的には年間、3,000ポンドという高い学費を払うのであるが、これは政府が支給するために全額ただになる。日本からの留学生はなどは9,000ポンドという高い授業料を収めなければならない。ここで、イギリスでは受験競争もなく、授業料もただで理想的であることが良く聞かれるのであるが、考えたらひどい話である。まず、小学校を出たとたん勉強をして大学へ行くか、人生を楽しむかを決めなければならない。イレブンチョイスであるが、現在では16歳まで方向転換が可能である。確かに、受験競争は少ないが、結局よっぽど優秀でなければ大学へ向かうことができず、また、中等教育への授業料を収められるかどうかで決まることになる。天性によって成績が優れるか親に経済的余裕のあるかの学生に100%の高額の補助金を出すのであるから、日本では決して受け入れられないであろう。エリートの再生産についての社会の合意があるというのも階級社会ならではのことである。

また、オックスフォード大学には PPE という学部があり、哲学、政治学、経済学の単位を取らなければならない。非常に面白い制度である。いかにもオックスフォードが求める人間像である。こういった形で日本の経済学部や法学部の学生に勧めたいところである。

オックス・ブリッジとは異なり、ロンドン大学や LSE は新しい大学で雰囲気はまるで違う。特に、LSE は町中でゴチャゴチャした建物の錯綜し、なんとなく東京の私立大学に似ており、各スタッフの部屋も狭く日本型の大学である。LSE にはフィリップスという経済学者の作った国民所得を決定する理論を解説するための機械が置いてある。アクリル樹脂で作ったもので、色のついた水が流れて、所得が増えると消費や投資が増えてこれがまた所得を増やすという乗数過程などを目に見えるようにしたものである。フィリップスはもともと電子工学かの先生であるのでこの様なものはお手のものであろう。昔読んだ本に書いてあったので面白いことをするなと思っていたが、実物を見てその一見明白なシステムの説得力に感心した。

XI イギリスの教育

イギリスの教育は一種の理想化して語られることが少なくない。子供をイギリスの学校へ入れた人の話を聞くとさすがであるという感じがする。確かに、パブリック・スクール（直訳すれば公立学校だが、私立学校で、教会などに附属するグラマー・スクールに対して公衆に開かれているという意味でパブリックであり中・高＋αの私立学校である）などではノブレス・オブリージを教え、社会を背負って行くための責任を自覚させる。教育もラテン語から始まり、古典主義で教養を重視することになる。教師も立派な学者で、学会で活躍するような人がいるという。

しかしながら、これらは全てのイギリス人に与えられる教育ではない。いうまでもなく、それは同世代人口の一部に対する教育で、大学へ5%（専門学校まで入れると20%程度となると

いう話である) もいかないイギリスでは大部分は労働者として教育される。コンプリヘンシブ・スクールやモダン・スクールである。すなわち、人生を楽しみ、労働の技術につけるための教育である。同じ自ら考える教育でも自ら楽しむ教育である。

また、イギリスでは小学校から教育課程も個人の能力に応じて進んだもの、遅れたものを選んで個性にあった教育が行われる。また、授業も詰め込みではなく、考えさせることを主眼に行われる。日本の記憶一点張りの教育でなく、なぜそうなるか、自分はどのように考えるかを教える。この様な教育は確かに素晴らしいものがある。日本の詰め込み教育、受験競争など非人間的でおおよそ教育とは言えないような日本の現状とは大きな差がある。

結局、イギリスがこの様な立派な教育ができ、また、個人の生活を楽しむような教育ができるのは階級制度のためである。労働者階級と上層階級では生活や考え方が異なるから異なった教育ができる。一般の労働者に微積分はいらないのが普通であり、普通は足し算とかかけ算ができれば十分であろう。歴史教育はそれなりに必要であろうが、百貨店の店員に物理学はたぶんいらないであろう。その人に必要でしかも適した教育が本来の姿かも知れない。しかし、これは日本では差別教育であり、子供からチャンスを奪うものであることも間違いがない。しかも、将来社会が変わったときの適応能力はない。

日本の教育は基本的に平等教育であり、平等に大学へ行く機会がある。従って、大部分の人にとって不必要な数学や物理学を勉強しなければならない。もし、数学や物理学の教育を廃止すれば、それはそれなりに平等になるが、そうなれば社会は動かないし、学問は減じる。全ての子供に同等のチャンスを与えなければならないとすれば、記憶だけを教育の基本にせざるをえなくなる。さらに、ものを考えさせる教育を行えば、その評価が恣意的となり、主観的な扱いとなってしまう。平等をベースに全ての人に大学を開けば受験競争、詰め込み教育しかなく

なる。しかも、人口の35%もが大学に行くようになれば、その間の差別化を巡って競争になるのは当然といわねばならない。もともと人間はそれほど勉強の好きな動物ではなく、特に嫌いな者も少なくない。その者の青春を奪ってしまうことは余りにも問題が大きいのではないかと思う。とは言うものの、イギリスのように小さいうちに階層にを分けてしまうことも日本人には許容できるものでないであろう。

結局、階層化を容認するか、不要な競争をさせるかという選択になる。また、アメリカ流に勉強したい人には勉強させ、勉強したい人には高い授業料を払わせるというのも一つの選択である。昔のドイツ流に卒業制度を導入せず、ついでに行けなければ落伍させるだけ、大学に入ったからといって特権は全くないといういうのも一つであろう。日本のように平等に権利を与え、しかも大学卒業生を入社で特別扱いするのであれば、受験戦争が激しくなり、学生は勉強しなくなるのは避けられない。大学は教育するところではなく、特権を貰いに行くところになっていることは学問の発展をも阻害し、学問の世界にとっても極めてまずい状態である。また、そのラット・レースのために、多くの若者は人生を無駄にしていることになる。筆者としてはドイツ式に卒業制度を廃止することが望ましいと考えている。大学は学問するためのものであり、社会的特権を付与するためのものではない。大学受験がなくなれば、余分な努力を必要としなくなる。

もともと、日本は社会を規律する原理原則が弱く、知的好奇心を軸とする西洋流の学問そのものに対する関心も小さな国で、大学教育を維持することは容易でない。受験勉強でも、やっていないよりはよいと考えることもできよう。

この様な教育も利点がないわけではない。結果を考えてみれば、経済的にはイギリスの成果と日本の成果の差は明かである。全ての労働者が数学や物理学を程度は別としてやっているの、新しい技術革新によって仕事が変わっても職場で教育する基礎ができています。イギリスで

は技能者はその職種が技術革新で需要が減少すると即失業者である。また、そのために労働者の抵抗から新しい技術の導入は難しいという。日本は画一教育を受けているので企業は非常に水準の高い同質的な労働者を確保でき、生産性の向上を図ることができた。現場主義で自発的な経営管理ができるのも労働者の教育水準が高いからである。自らの権利と生活を守ろうとするイギリスの労働者と、企業と協調的にやって行こうとする日本の労働者では自ずから結果は異なる。特に、近年の経済構造の変化は知識集約型になっており、ソフト化・サービス化がその基本である。それに対する受容能力は圧倒的に日本の方が大きい。現に、いわゆる単純労働者はロボットに置き換えられ、就業人口の大部分がかつての意味での労働者でなくなってきたときに日本の教育の成果は大きい。

しかし、個人を考えてみればどうであろう。青春の重要な時期を何のものを考えずに受験勉強に専念した者が社会の指導者になって行くとすれば恐ろしいことである。また、労働者にしてももっとも楽しく、人生を楽しむ方法を獲得できる時期を無駄な勉強で潰されることになる。社会や企業は栄えるが個人は精神的にも貧しいままということになる。

イギリスでは、かつて11歳でテストをして振り分けていたが、現在は16歳で試験を行っている。もちろん、私立学校に行く限り大学への道は既に振り分けられるのであるが。新聞での労働党のキャンペーンで「彼女は16歳の時に大学進学的重要性を分らなかった」として、彼女にも大学教育を受ける機会を与えるべきではないかというものである。これに対して、保守党政府は教育水準の引き上げを重要視しており、むしろ統一試験を2年引き下げて、1992年から14歳にして実行するとしていた。早く振り分けた方が個人の能力にあった効率的な教育ができるのは間違いないが余りに若いときから高等教育への機会を失わせるもの問題になる。日本の場合も、かつては実業高校に非常に力を入れたが、国民の多くの選択は大学への道が残される

普通高校であった。このために、激しい受験競争となり、若い時代を受験だけに費やすという非常に偏った人間形成になってしまっている。しかも、いくら平等に機会が開かれているといっても中学卒業の時の学力の分布が大きく変わることはない。日本の受験体制はマラソンと同じであり、全体の中での順位を変えることは極めて難しい。じっと我慢して、上位者が脱落してくれるのを待つことでしかない。このために、大部分の子供にとって苦痛以外のなにものでもない。しかも、学問のために大学へ行くという風潮は全くなく、社会的な位置づけを求めて青春を棒に振らせるのであるから非人間的としかいいようがない。しかし、建前として平等を維持することも個人の幸せや学問の重要性よりも日本人社会にとっては重要なことなのであろう。

教育とは難しいものである。良い教育を行うためには対象を絞り集中的に行うことが望ましいことになる。しかし、機会の平等を考えると子供に選択させるのは余りに酷ということになる。日本のように機会の均等が与えられ過ぎ、教育の意味がよく分からなくなってしまうのも困ったものである。

イギリスの教育は自分でものを考えさせる教育である。あなたの意見は何か、どの様に考えたらよいかを自分で探させるという。日本の教育とは全く反対である。皆がどうしているかよく見なさい、皆と仲よくやりなさい、である。親が子供をしかなるときでも「ほら見ててごらん、そんなことしているはあなただけでしょ」である。自分のものの考え方をいかに作るかが教育の基本であるのは当然であろう。しかし日本ではそうっていない。しかし、人間の生き方としてはそうあるべきものの日本社会ではその様に教育された子供は極めて生きにくい。英国から帰った子供が日本の学校では協調性がないという理由で虐められたり、先生から低い評価を受けるという。あるイギリス人の話であるが、子供に遅くまでおきているので注意したら「あなたはこの家の主人だと思っているのか」と聞

かれる。「そうだ」と答えると、「ユー・アー・アローン（そう思っているのはあなただけだ）」と答えたそうである。自分の考えを持つということは突き詰めればそこまでいくことになる。日本ではやはりこれを許諾することはできないであろう。日本社会は協調性をそれこそ、太古の昔からもっとも重要な道德基準としてきた。聖徳太子の憲法も第一条が「和をもって貴となす」である。実際、日本の経済力の原動力は個人の優れた才能というより、協調によって生み出されたチーム・ワークの力であろう。

個人主義の考え方は、個人として独立してものを考える能力であるから、これを養うことが教育の目的となる。かつては11歳で自分の進路を選ばせたのは当然のことなのかも知れない。自らの進路を他人が選ぶ権利はない。従って、それまでに自ら判断する能力をつけさせることが重要になる。日本では個人が自ら判断するのではなく、環境や年齢に従って、それらしく判断することが求められる。学生時代の同級生に全共闘運動をやっているのがいたが、その言いつ分は「学生の時にしかできない」からだそうである。学生運動は学生にしかできないというのは定義としては正しいのであるが、イギリス人ならその幼児性に驚くであろう。彼は商社に入ったのであるが、反帝国主義、反資本主義の主張と商社がどのような関係にあるのかは分からないはずがない。自ら、入社して組織を破壊することを目的としていたわけではなく、一生懸命働いている。日本人は若いときは反体制で、就職すると会社人間になり、年をとると宗教に凝るというのを全く不思議に思わない。ほとんどの人間がそうしているからである。

本来、教育とはボンサンス（良識）、すなわち、理性を認識する能力を高めるためであり、日本流に言えば、人格形成である。イギリス流の教育はその意味で日本の多くの教育よりも優れているのは間違いがなかろう。勉強の嫌いな子が、自分は勉強が嫌いだから所得は少なくとも人生を楽しみながら真面目に働いて堅実にやりたいといったら親は肯定的にはなれない。し

かし、日本のように勉強の嫌いな子に非人間的な状況においてまで勉強させるのは如何なものかという感じもする。日本の様にいつでも進路変更ができるように条件を揃えておくことは社会の柔軟性を作ることにはなるが、個人の生き方として少なくとも明治以来一生懸命学んできたヨーロッパの基準からは非人間的なものとなる。

イギリスで子どもに教育を受けさせた人の心配は帰国後の適応能力の問題に加えて、アイデンティティを非常に心配している。個人主義社会は個人の価値判断を最大限重視すると共に、個人の価値判断を支える基本的共通認識、社会共通資本のようなものを重視する。このために、公共概念を植え付けることも教育の基本である。どこに行っても戦死者の墓碑名が石に刻まれており、祖国への忠誠を厳しく要求する。また、キリスト教という共通の基本認識がある。無神論者といえどもそれが作り出すところのルールは守っている。

このような基本的な社会的共通基盤があつてこそ個人主義社会が成立する。社会契約説に代表されるように、人々は自発的な契約を行ったのであるから守らないわけには行かない。そこで、その様な基本を仮に身につけてしまうと日本人でなく、イギリス人になってしまう。また、日本人の基本を残したまま個人主義となれば、これはまた自己矛盾を生じてしまう。いまだ、シントウイスト（神道主義者）に出会ったことはないが、日本人のほとんどは神道のルールを守っている。すなわち、大部分の日本人は穢れを嫌い、争いを好まず、正月を祝い、初詣に行く……である。この様な大部分の日本人の共通基盤を持たなければ、日本で生活して行くのは難しい。かと言ってイギリス流の共通基盤を持たなければ、根無し草の個人主義になってしまう。そこで、多くの場合、イギリス在住の日本人は子供を日本人学校に入れることになる。

イギリス人にとっても教育の問題も大きな問題である。先に述べたように、親に経済的余裕が必要であり、やはり、進学のために私立の学

校へ行かせることとなれば、中産階級の人々にとっては大きな重荷になっている。子供を私立中等学校に行かせてる両親は旅行もせず、遊びもなくひたすら貧乏を耐えているという。また、両親の実家などが金持ちの場合、そこから支援をえているような例もある。

この様な環境のせい、日本の独特の教育のしがらみから自由なせい、日本人学校ではいい教育をしているように見える。特に、教師が研究熱心である。一つには日本の学校に遅れないか、一つにはこの地において子供達に国際性を身に付けられないかに一生懸命のように見える。教師自身もこのまま日本に持って行ければ素晴らしいのだがという。なぜ、日本ではまとも教育ができないのか。結局、日本社会では一人が突出したことはできない。親は進学にしか興味が無い。そんなことが教師にも教育の理想を追求させることを妨げる。困ったことである。日本の学校で私の子供が今日は自習ばかりだったという、理由は先生が友達の結婚式に出るためだという。また、教室で騒いだためらしいが、廊下に机を置かせて一日、そこで勉強させられたという。陰湿ないじめである。自分の経験、自分の子供の教育からでしか情報を得ることができないが、日本の教育は相当問題が大きい。

XII 大学教育とは何か

いろいろな大学を見てきて感じることは、各大学制度もそれぞれ一長一短である。ただ、今後の大学制度を考えるに当たっては次の二つを考慮する必要があるだろう。一つは大学が知識産業化社会の中心的位置になるべきであること、もう少し正確に言えば個人が自らの境地を切り開くための手段になりうることである。もう一つは産業社会を脱して新しい社会改革のパラダイムが大学にあるのではないかという期待であった。それは筆者自身が大学で求めたものであった。もちろん、学問の伝統をもっとも正當的に受け継いでいる物理学や数学の世界ではもっと自己完結的な考え方がありと思われるが、社会科学は社会との関係をもっとも重視せざる

を得ない。すなわち、今回の出張で多くの経験をさせていただき感じたのは、学問がそれぞれ伝統を持ちながら社会の変化に対応していることである。確かに教育が産業のインプット（原料）と考えれば、日本の教育は成功してきた。しかし、教育は人間の存在にかかわるインプット、すなわち、精神の原料であるとするこれまでの教育は成功してきたとは言えない。ヘーゲルが「人間の精神の偉大さと力については、いくら大きく考えても、すぎることはない」という言葉を残しているが、真理を追求し、知を楽しむ精神の自由こそ大学の原点と考える。外国の教育機関も果して精神を高めることにどれだけ成功してきたかは疑問が大きい。

アメリカのビジネス・スクールでの教育はアメリカ産業を成功に導かなかったばかりか（個人的な成功は導いたかも知れないが）、精神を高めることにも成功したようには思えない。しかしながら、振り返って日本の大学教育が提供できる知的産業としての役割はそれ以上の成果があるかといえば心許ない。ヨーロッパである人が、アメリカは結局、貧しい人の集まりだという話を聞いたがなるほどなと思った。貧しさから脱するために国を作り、企業を作り、大学も作った。従って、個人の経済的な成功に効率的な大学を作ることに力を入れるのは当然であろう。競争原理はフェアでもあり、効率的でもある。しかし、日本のように長い間、独特の価値観を保持しながら社会のあり方を追求してきた者にとってアメリカ式を効率的でフェアだから、という理由で導入するわけには行かない。大学は学問の効率性ととも精神の世界での立場を取り戻す必要があるように感じる。それは、大学が修道院から生まれ、神学を基礎に人間の存在にかかわる問題を解決することを最大の課題にしてきたことに関連しよう。かといって、ヨーロッパの大学のように、階級を前提とした教育体系とするわけには行かない。日本の伝統に則る形で、新しい改革が求められるところである。今後、我々の努力にかかっているように。